

はしがき

近世には書物を読むことのできる人々が庶民にまで広がった。この事は広く知れ渡った事実であるが、そこには説かれるように農村部にまで及ぶ寺子屋教育の普及即ち庶民の学び、併せて出版文化の発達があった。「しか呵られて親父の読めぬ本を読み」(『武玉川・十二』)とあるのは、仮名書きの春本を読んだ叱られたので、親父の読めない漢字真名本に取り替えたというのである。それは親子の世代を越えた識字率の高まり、また出版文化の進歩で種々色々の読物が出現していることを物語っている。本書はこのように推移発展する江戸時代265年間に、読者と貸本屋の問題を設定して考えてみたものである。大略の見取り図を描けば以下のようになるであろう。

当初、書物を読む人々は、身近に写本・板本・一枚物等の書物を備えていて、生活の知識や知恵を学び取っていた。そこには既に知識や技術を重宝便利とする社会基盤が到来していたのである。それは日常生活に必要な習俗や作法、世の中を生き抜くための経世法、あるいはお互いの礼儀や教養を身に付けることが必須とされ、これらの知識や技術を合理的に獲得して生活に生かすことであり、それには自学自習しなければならなくなったのである。学習媒体として、最も効用性の高い優れ物の書物は教科書として用いられ、それは地域や時代を超えて現代にも続いている。それゆえ書

物は伝統的に尊ばれ大切に取扱いわれてきている。いくら種々の媒体が進化しても、その基底には必ず文字で書いた書物形式の物が存在するのである。

こうして写本や出版文化が隆盛する中で、庶民が読書の有り難さを覚えると、一方では道学者や実学者の説く書物は面倒くさくなってしまう。道徳書や教養書、実学書ばかりを堅^{かたひじ}耐張^{ひぢ}って読むより面白さや珍奇さに満ち溢れた書物を読む方が取りつき易いのである。世の中のまだ知らない書物を見つけて読む方が楽しいのである。読んではならないと禁止されている書物を読んで悦に入る方が嬉しいのである。これら庶民の興味や慰みの読書に目を付けたのが貸本屋の誕生と発展の原動力であった。則ち、庶民読者の興味をそそり、見たことのない世界や名所旧跡へ連れ出す書物、隠された秘密や真相を解き明かす書物、便利性に満ちた生活実用書を、その時点ですぐに調べて手元に届けるのが貸本屋なのである。このような本の多くは大切に身辺に備用するに及ばず、読み流して事は済む。そして貸本屋は読者に対応して利益を得る方法を色々に企てる。書物の流通で読者に最も身近なのが貸本屋である。慰みや興味で読書する大衆読者の存在があれば、営利を目的とする出版業者がそれを見過^{しり}ごすはずはなく、読んで楽しい娯楽読物を積極的に製作販売するようになる。それは具体的には重板^{じゅうばん}（海賊版^{るいはん} 類板^{るいはん}（類似版）の製作販売をみれば理解されよう。しかしそれを何も出版業者に独占させなくとも、読者の嗜好を熟知している貸本屋の方が面白い本を作ることが出来、利益が得られることを認知するようになる。こうして貸本屋の出版は娯楽読物の幅を広げ、多様さを増し、平易さ低俗化を増し、書物形態にも変化をもたらす。

このことを文学史上に概観すれば、本書31頁以降にも書いているように、当初教化啓蒙を基本とした仮名草子から、次に少し余裕のできた町人読者を対象にした浮世草子になり、少し上級読者向けの読本になり、江戸時代中後期にもなると幅広く庶民読者を対象にした滑稽本・洒落本・黄表紙・合巻・人情本など新しいジャンルが誕生することになる。それらの冊数も仮名草子の大本10巻10冊前後から浮世草子や読本の半紙本五巻5冊前後になり、黄表紙の中本5丁1冊は合巻になり、洒落本の小本1冊など書形も取り扱いやすく読みやすく小型本になる。多くは彩色の絵表紙をつけて購買者の目に付くようにした。内容は興味本位に大笑いする慰み物、軽薄な読物ばかりになったかと言うとそうでもなく、世の中の問題を裏返して痛烈に突いた作品も少なくない。江戸時代でも読者は多種多様で勝手気ままで移り気があり、好色本等に耽り一人笑いに興じていてもそれには終らず、魅力に満ちた書物を常時漁り続けるのである。それは読者の本性である。

このような情況のもと、興味津々と面白く読み進ませる中で、人間の在り方や考え方、悪に対して決して負けず道義にもとづいて戦い、問題解決をはかる人物を設定して提供したのが曲亭馬琴の読本であった。彼の方法は江戸の武家社会で受け入れられたのみならず、地方の読者にも受け入れられ、貸本屋になくてもならない読物となって愛読された。言うまでもなく、馬琴の読者には好色本の読者も、馬琴が無学と軽侮した為永春水の人情本の読者もいる。

本書では長い間考えてきた文学史上における貸本屋の役割を、こうして少しは明らかにできたのではないかと思っている。

本書は、昭和60年(1985)小著『本のある風景(こつう豆本70)』(日本古書通信社)を第一部とし、2021年6月藤本幸夫氏編『書物・印刷・本屋——日中韓をめぐる本の文化史』(勉誠出版)に掲載された拙稿「貸本屋の横顔」を「近世貸本屋の展開」と改題第二部とし、どちらも字数制限がなくなったので大幅に増補改訂した。新稿「馬琴の書物探索と貸本領域」を第三部とし、『江戸時代の貸本屋——庶民の読書熱、馬琴の創作を支えた書物流通の拠点』として纏めたものである。

なお、昭和57年(1982)『近世貸本屋の研究』以来、貸本屋や書物に関係する事柄は後掲の拙著等にあれこれ記してきており、重複を避けることを心掛けながらも、本書を独立して通読できるように配慮したため、必要な範囲での重複がある。その主な関連拙著は次の通りである。

『近世貸本屋の研究』(東京堂出版昭和57年〈1982〉。1997年5刷)

『近世の読書』(日本書誌学大系52 青裳堂昭和62年)

『浄瑠璃本出版の研究』(東京堂出版1999年)

『江戸時代の書物と読書』(東京堂出版2001年。2002年3刷)

『江戸時代の図書流通』(思文閣出版2002年。2005年3刷)

『江戸庶民の読書と学び』(勉誠出版2017年。同年2刷)

2023年3月31日

長友千代治